

一次の文章は中井久夫『私の日本語雑記』のなかの一節「われわれはどうして小説を読めるのか」の一部である(設問の都合で一部省略し、表記を改めたところがある)。読んで設問に答えよ。

言葉の意味は名付けから始まる。子どもはまず、母語の音調、リズム、音素を覚える。この準備は胎内から始まっているようだが、子どもが言語は意味を持つという事実を体験し、身につけてゆくという作業は、出生以後である。言葉を口にするよりも先にならぬ多くの言葉(音素の組み合わせ)が何を指すかはわかっているらしい。外国語を話すよりも聞き覚えるほうが一般に先なのと、これは同じことだろう。

1 タイショウ的に、老人は名から忘れる。文法構造のほうはかなり後まで残って、名のあるところは「あれ」「それ」でつぎはぎされる。文法構造あるいは文脈的ネットワークはずいぶん後まで保存されるようである。たとえば「てにをは」である。これは生きてゆく日々によって形成され再形成されたたかな綱目構造である。キーワードをいろいろ尋ね、あるいは言い当てながら、ほかならぬその「あれ」に当たるものを言い当てると、老人が全身で喜びを表しながら、「それだ!」という時期がある。これは文脈が何が正しい座かを暗に指示しつづけている証拠であろう。認知症老人の世界(あるいは世界のシャゾウ<sup>2</sup>としての言語世界)は、クロスワード・パズルがあちこちにある世界だ。本人はもどかしくはあるだろうが、何が「びつたりの言葉」かの感覚は残っている段階がある。

しかし、悩ましい問題がすでに古代ギリシャで提示されている。アイデア論である。

私たちは「椅子<sup>いす</sup>」といい「犬」という。しかし、さまざまの椅子があり、犬がある。それをまとめて「椅子」「犬」といわせるものは何か。

一般の辞書は言語で「椅子」「犬」を定義している。しかし、私たちは直観的に「椅子」「犬」といつているのであって、定義を覚え、当てはめて、「やっぱり椅子だろうな」とすることはめつたにない。では理想的な「椅子」があるのか。

絵入り辞書ではいろいろな椅子の形が描いてある。しかし、とても「椅子」を尽くしたものではない。そこで、プラトン<sup>(注1)</sup>は天

上に「椅子」の「イデア」があつて、それは眼にみえないけれども、地上の不完全な「椅子」を椅子と捉えるように働いているのであるという。「イデア」には、観念、思想、その他いろいろな訳があるだろうが、元来は「形」ということらしい。こうしたことは若い時にはおとぎ話のように思えたので、今までシンケン<sup>3</sup>に考えたことがなかった。

しかし、高校生のドイツ語の時間、昔のことだから訳読が中心の授業であつたが、真面目な初老の先生が、「犬」と訳しても、日本の犬とは違う。ほんとうは「洋犬」と訳さなければなりません」と言った。当時は各種の「洋犬」が跋扈する今と違って、だいたいは柴犬のようなのが「犬」だった。「洋犬」はテリアぐらいか。「ふうん、洋服、洋館、洋樹としなければならぬのか。それでもいろいろあるだろう」と私は思った。しかし、この先生のコメントは頭の片隅に残つて『失われた時を求めて』の中の訳語などには、「ブルースト<sup>(注2)</sup>の指しているものと違うのがずいぶんあるだろうな」などと考えた。そんなに違つても、なぜ私たちは外国の小説が読めるのだろうか。あるいは源氏物語を。私は現に読んでいるのだが、不思議である。訳語の少しの違いよりも、厳格主義者にはこちらのほうが問題ではなからうか。

私は最近、ある勉強会で尋ねてみた。イメージとそれに対応する名がありますね。イメージが先だと書いてある本があるけれども、ほんとにイメージなりモノが先ですか、それとも言葉が先ですか、と。答えは、最初に子どもが言葉を覚える時には、モノなりイメージが先でしょうね、だった。

単純にイメージが優先するとすると、われわれは外国の小説をどうして読めるのだろうか？ この質問に対する答えは「それは私たちがいい加減だからです」だった。この「いい加減さ」には深い意味があるぞと私は思った。

子どもは名付けを楽しむ。名付けは世界のセイフク<sup>4</sup>である。子どもは行きつもどりつ、言葉の範囲を確定してゆく。しかし、それには厳密な面といい加減な面とがある。かなりいい加減な椅子でも座れば椅子という。いや、壊れて座れない椅子も「椅子のこわれたの」と認識する。しかし、非常に形は似ていても「いや、椅子でない」と断言する場合もある。「椅子」の範囲は、また、拡大したり縮小したりする。そして、「何々に似たもの」といつたりする。言葉とその意味の対応はアメーバに似ている。

私たちのサツカクは、帝国主義国が世界を分割してしまつたように、言語が世界を分割していると思ひ込んでいることかもしれない。実際はそうではない。さまざま椅子を「椅子」と名付けることによって、私たちは利益も得たが、粗雑にもなつた。犬に比べて嗅覚は一万分の一にも鈍くなつたそうである。他の感覚もそうだろう。

私は、たまたま、色彩のエスノ言語学(注3)によつて、いかに人が色を言語化することの不十分かを知つた。

<sup>C</sup>普通の市民は高度に概念的に色をみている。樹を緑に、海を青く、と「固有色」に塗るのが多数派である。小学校あるいはそれ以前からの教育の結果である。画家たちも印象派の時代になつて初めてこれに挑戦したのである。

しかし、樹は緑、晴れた空は青という「概念化」がなければ、子どもは当惑してしまうかもしれない。人間にとつて未曾有のもの色の同定は**ずいぶんあやふやである**。月を最初にシユウカイした一九六八年の宇宙飛行士は、月の表面の色についての意見が大幅に分かれた。ある人は明るい色といい、ある人は緑がかつていたといつた。私も『アサヒグラフ』(注4)でみたが、何ともいふような色であつた。私たちは、みたことのない色は、既知のどれかの色に片寄せて認知する。私の場合は淡い灰色であつた。この片寄せは言語という粗い網の目で世界を分割しようとする場合には避けられない。物体の色にしてこうであるから、抽象概念はなおさら、**具体物も同じくであろう**。

色は、精神医学者サリヴァン(注5)の言う「合意による妥当性確認」によつてしか伝達できない。「これが赤だよ」「うん、ぼくにもこれが赤だ」。これが合意である。つまり、純粹の「質」は意見の一致によつてしか確認できないのである。形ならば、いろいろ説明することができる。しかし、色については意見が一致しなければそれ以上の正否は問えない。

注1 プラトン——紀元前5〜4世紀のギリシアの哲学者。

注2 プルースト——マルセル・プルースト(1871〜1922)は、フランスの小説家。代表作に『失われた時を求めて』がある。

注3 エスノ言語学——言語と民族文化の関係を研究する言語学の一領域。民族言語学。

注4 『アサヒグラフ』——当時刊行されていた写真雑誌。

注5 サリヴァン——ハリー・S・サリヴァン(1892〜1949)は、新フロイト派に属するアメリカの精神医学者。

問一 傍線部1〜5、7のカタカナを漢字に改め、傍線部6の漢字の読みをひらがなで記せ。

問二 傍線部A「これ」の内容を三五字以内で記せ。

問三 傍線部B「こちらのほう」の内容を三五字以内で記せ。

問四 傍線部C「普通の市民は高度に概念的に色をみている」を七〇字以内でわかりやすく説明せよ。

問五 傍線部D「この片寄せは言語という粗い網の目で世界を分割しようとする場合には避けられない」と筆者が言うのはなぜかを七〇字以内でわかりやすく説明せよ。

二 次の文章は大饗広之『豹変する心』の現象学 精神科臨床の現場から』の一節である(設問の都合で一部省略した)。読んで設問に答えよ。

心的状況の変化がドラスティック(注1)にみえてきたのはつい最近のことである。ほんの二、三〇年前までは、まだ人々の営みはリアルな感覚、あるいは揺るぎない自明性に裏打ちされていた。昨日のように今日が始まり、今日のように明日が積み重ねられていく。そして私と同じようにあなたも感じ、あなたと同じように彼らも感じている、だれもが共通の世界を生きていくといった同型性、すなわち時間的、間主観的な連続性が疑われることはなかった。

もつとも日常世界が本当に途切れることない、ただノツペリと変わることのない連続性を意味しているのならば、それほど退屈なこともないであろう。だから秩序には「切れ目」がどうしても必要になるのである。伝承的共同体のなかでは、ふだん人々は堅い秩序のなかでたんたん日々を過ごし、祭りという許された時にだけ一斉に日常を中断していた。祭りのなかで人々は非日常へと外出し、「聖なるもの」と一体になりながら、ほんの少しの力オスを体験する(注2)。そのことは日常の秩序を活性化することに役にたつばかりではない。もし秩序のなかにとつぷりと浸ひかっているだけであるなら、われわれは世界を世界として認識することもなかったであろう。切れ目を通して秩序の外に出るからこそ、それを外部から俯瞰ふかんする視点が可能になり、われわれにとつての世界が立ち現れるのである。

一般には誤解されているようであるが、祭りというのはもともと平和な日常に属するものではない。それは生活秩序から外出するための装置であり、そこから力オスへと通じる扉はいつも少しだけ開かれているのである。「無毒化」されているとはいえ、かつてはこの国でも祭りのなかで死人が出るのがまればはなかった。要するに一歩間違えば、祭りは恐ろしく危険なものにもなりうるのである。カオスの毒Bに日常の秩序が曝さらされないようにするには、祭りAと日常のあいだに厳格な一線が引かれていなければならなかった。それは神聖な場所で区切られた時にだけ許されてきたのである。様々な儀式的な取り決めも、カオスの毒が漏出しないための枠づけであった。

それが今ではどうであろう。都市の日常はいつも俗化した祭りでも満ちあふれていて、祭りそのものが日常になってしまったかのようなものである。祭りはいつでもどこにでもあつて、それゆえどこにもなくなつてしまつたようである。メディアを通じて、子供の日常にさえも祭りモードは不用意に混入してくる。限定された非日常の時空間でとり行われるからこそ、祭りは祭りだつたのである。そして祭りはそれ自体を目的とした、すなわち無目的な活動であつた。ところが、今では祭りは大衆化して営利目的に用いられる。すっかり日常の一部になつてしまひ、祭りとしての形態がもう崩壊してしているのである。

そうなると困つたことが起こってくる。<sup>c</sup> 祭りが本来もつていた媒介機能が損なわれるとともに、カオスの漏出を防ぐ仕組みも働かなくなるのである。祭りも、その縮刷版としてのアソビも、すでに取り返しがつかないほど変質している。いつ頃からか、人はアソビのなかに顔をのぞかせるカオスに怯え、あらゆるアソビのなからカオスの臭いを徹底的に締め出そうとするようになった。子供の目にする物語からは悲惨さや猥雑さが慎重に拭われ、空き地には立入り禁止の看板が立てられた。川では遊泳が禁止され、一度でも事故が起きると遊具は公園から撤去される。徹底的な管理によつて、人は子供たちに穢れのないアソビを提供できると思うのだろうか。

祭りあるいはアソビが「秩序の外部」であるといつても、もちろんそれはカオスのように無秩序なものではなかつた。それは日常とは区別される自己完結的なモードで制度化されていなければならない。もし子供のアソビを秩序の内に取り込もうとするならば、すなわち大人がやみくもにこれを管理しようとするれば、それは日常に取り込まれて、アソビとは別の何かになつてしまふ。おまけにその結果、そこにカオスが引きよせられることになるのである。今どきの子供たちの顔にカオスの影がよぎることはないであろうか。大人の知らないところで、いつしかアソビは残酷ないじめと区別がつかなくなつていたのである。

アソビという体験領域を日常の秩序(ノモス)から切り離しておくことが、日常のなかへのカオスの侵入(アソビの変質)を防いでいることを最初に発見したのは社会学者のカイヨフである。<sup>(注3)</sup> アソビとは、制度化された小さなカオスのことであり、いわばカオスの出先機関といつてもいいものである。カオスとは方向性のない未分化なエネルギーそのものであるが、アソビはノモスとカオスのあいだにあつて、あるときはノモスのなかにカオスのエネルギーを危険なく取り入れるためのポンプとして、そし

であるときは過剰なエネルギーを放出する水路として働くのである。この二つの役割が機能するためにはノモスはアソビから完全に切り離されていなければならない。

三つの体験領域はそれぞれまったく異なる時間性によって区切られている。ノモスが未来志向的、すなわち「くのために」という目的志向的な時間のなかで作動するのに対して、アソビとは本来「何のためにもならない」ものであり、無目的的な、今・現在という時間のなかで営まれる。砂場でトンネルを掘って遊んでいる子供に「そんなことをして何の役に立つの?」というのがおかしなのは、どんなアソビもその行為のなかで完結しており、それ自体が目的でもあり手段でもあるからである。もし「くのために」というそれ以外の目的性(未来志向的な契機)がそこに加わると、アソビはアソビではなくなってしまう。一方、カオスは時間的・空間的にノモスの対極にあり、時間と秩序を反転させてしまうという破壊的性格を持っている。ノモスが未来を、そしてアソビが現在を志向しているのに対して、カオスにはそもそも秩序(反復するもの)としての性格が欠けている。

さて、今日のようにアソビがノモスの境界を侵犯するようになると、そこに何が引き起こされるのか。アソビがノモスの奥深くまで入り込むと、ノモスとカオスのあいだで働いているアソビの媒介機能が失調し、その結果日常と非日常の境界線も、あるいはファンタジーとリアルとの区別も失われてしまう。アソビがカオスを引き連れてくる、あるいはアソビのなかにカオスの相貌ぼうぼうが混入してくるのである。

ここ二、三〇年のアソビの変質ぶりは確かに急速であった。祭りが非日常としての意味をもつのは、日常と非日常のあいだ、ハレとケのあいだに時間的・空間的な境界線があるからであるが、今では縁日モードはいつでも商店街にあふれかえっている。祭りに出かけなくても、パソコンを開けばネットゲームにいつでも入り込めるし、どんなサイトにでも仮面をかぶって参加することができる。未成年であっても裏サイトに堂々と出入りし、そこで祭りのように欲動を発散させることもできる。なにしろ今どきのファンタジーは下手をすると現実以上のリアルさで提供されるのである。

枠組みを失ったアソビほどやっかいなものはない。アソビが日常世界へと無造作に浸透していくとき、そのすぐ背後にはもうカオスが顔を覗のぞかせているのである。

注1 ドラスティック——徹底的で過激なさま。

注2 カオス——混沌。

注3 カイヨワ——ロジェ・カイヨワ(1913〜78)。フランスの社会学者。

問一 傍線部Aに「世界を世界として認識する」とあるが、それはどういうことか。二五字以内で説明せよ。

問二 傍線部B「カオスの毒」の意味を説明した箇所を二五字以内で抜き出せ。

問三 傍線部C「祭りが本来もっていた媒介機能」とは何か。六〇字以内で説明せよ。

問四 アソビが、傍線部D「制度化された小さなカオス」であるとは、どういうことか。六〇字以内で説明せよ。

問五 筆者は近年における「アソビの変質」をどのような意味で問題視しているのか。全体の論旨をふまえて、一二〇字以内で

わかりやすく説明せよ。

三 次の文章は与謝蕪村が上田秋成の著作である『也哉抄』<sup>やかなしやう</sup>に寄せた序文である。読んで設問に答えよ。

それ切字<sup>きれじ</sup>を知らんと要せば、まづ切字となづけたるは、いかなる字義<sup>じぎ</sup>ぞと眼をつくべし。さてそのむねをさとりえて後、切字といふ目は、字義あたらざといふ事をしるべし。されば我門<sup>わがもん</sup>には、切字とはいはず、しばらくこれを断字といふ。なほ口受<sup>くじゆ</sup>あり。切字はありてなきものなり、なくてはあるものなり。切字ありてきれぬ句あり、なくては切る句あり。この妙境に入りて字字切字ならざるはなし。それが中に、也哉<sup>A</sup>の二字をおく事ははめてたやすからず。いにしへの名ある集にもあやまち少なからず。まして今の世の人のつくり出さん句は、いはでも知るべし。ここに我が友無腸居士<sup>むちやうこじ</sup>なるものあり。津の国かしまの里にかくれ栖<sup>す</sup>み、客を謝して俗流に交はらず、ふかくやまとの国ぶりにふけり、人しらぬ古き書をさへさがし見ずといふことなし。もとより俳諧<sup>はいかい</sup>をたしみて、梅翁を慕ふといへども、芭蕉をなみせず、おのがごころの適<sup>ゆく</sup>どころに随ひてよき事をよしとす。まことに奇異<sup>A</sup>のくせものなり。このごろ一本を著し、その門生二三子余にしめす。すなはち也哉抄となづく。その説数条おのおの古き書によらざるなく、たまたまさとしやすからんことをおもひて、みづからの論を加ふといへども、つゆも古人ののりにもとらず。憶説といふべからず。余つらつらよみみてただむきを扼<sup>しめつ</sup>けていふ、これ不朽の書なり、二三子はやく木に上<sup>のぼ</sup>して、同志の人の聞<sup>き</sup>につたへよ。二三子諾<sup>だく</sup>す。すなはち序を余に乞<sup>こ</sup>ふ。余いふ、わがこの言質<sup>げんじつ</sup>なりといへども、理おのづから明らかなり。更に序して花をもとむべからず。二三子とく去れ、ともに計れ。<sup>B</sup>

于時<sup>とき</sup>安永甲午孟春<sup>まうしゆんかくわん</sup>下浣

平安夜半亭蕪村誌

注 目——名目という意。

無腸——上田秋成が俳人として使う雅号。

梅翁——談林俳諧総帥の西山宗因。

門生二三子——門生は門弟の意。門弟の露堂・秋律・竹母の三名を指す。

ただむき——腕の意。

問一 傍線部イ・ロ・ハを現代語に改めよ。

問二 傍線部 A について。わかりやすく説明せよ。

問三 傍線部 B について。具体的に蕪村は二三子に何を指示したと考えられるか、三五字以内で答えよ。

問四 蕪村の序文の内容から判断すれば、『世哉抄』は秋成のどのような態度によつて書かれたものと考えられるか。六〇字以内で本文に即してわかりやすく答えよ。

四 次の文章を読んで設問に答えよ。なお、設問の都合で送りがないを省いたところがある。

顔淵<sup>A</sup>侍<sup>ニ</sup>魯定公于台。東野畢御<sup>ニ</sup>馬于台下。定公曰、「善哉、東野畢之御。」<sup>スルヤト</sup>顔淵曰、「善則善矣。雖然、其馬將<sup>ニ</sup>失。」定公不<sup>レ</sup>悦、以<sup>テ</sup>告<sup>ニ</sup>左右曰、「吾聞<sup>レ</sup>之、君子不<sup>レ</sup>讒<sup>レ</sup>人。君子亦<sup>モ</sup>讒<sup>レ</sup>人乎。」顔淵不<sup>レ</sup>悦、歴階而去。<sup>ル</sup>須臾馬敗。聞<sup>ス</sup>矣。定公躐<sup>レ</sup>席而起曰、「趨<sup>ニ</sup>駕<sup>ニ</sup>請<sup>ニ</sup>顔淵。」顔淵至。<sup>ル</sup>定公曰、「向<sup>ニ</sup>寡人曰、善哉、東野畢之御也。」<sup>①</sup>吾子曰、「善則善矣。雖然、其馬將<sup>ニ</sup>失矣。不<sup>レ</sup>識<sup>ラ</sup>君子何以知<sup>レ</sup>之也。」<sup>②</sup>顔淵曰、「臣以<sup>テ</sup>政知<sup>レ</sup>之。昔者、舜工<sup>ニ</sup>於使人、造父工<sup>ニ</sup>於使馬。舜不<sup>レ</sup>窮<sup>ニ</sup>其民、造父不<sup>レ</sup>尽<sup>ニ</sup>其馬。是以舜無<sup>ニ</sup>失民、造父無<sup>ニ</sup>失馬。今東野畢之御也、上<sup>レ</sup>車

執<sup>リ</sup>轡<sup>たづな</sup>、御体正<sup>シ</sup>矣。周旋步驟<sup>しゅうしん</sup>、朝礼畢<sup>ル</sup>矣。歴<sup>シ</sup>陰<sup>や</sup>致<sup>シテ</sup>遠<sup>キ</sup>而馬力殫<sup>ツク</sup>矣。

然<sup>レドモ</sup>求<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>已<sup>。</sup>是以<sup>フ</sup>知<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>失<sup>スル</sup>也<sup>ト</sup>。」

(劉向『新序』)

注 顔淵||孔子の弟子。

歴階||階段を急いで下りる様子を表す。本来は一段ごとに両足を揃えるのが礼であるが、一段ごとに一足で下りること。  
 舜||中国古代の名君。失民||民心を失うこと。造父||中国古代の御馬の名人。  
 周旋步驟||ぐるぐる回って歩かせたり走らせたりする。

問一 傍線部A「侍魯定公于台」・傍線部C「須臾馬敗」・傍線部E「求不已」をひらがなのみで書き下せ。

(例) 学而時習之↓まなびてときにこれをならふ

問二 傍線部B「吾聞之、君子不讒人。君子亦讒人乎。」、傍線部D「舜不窮其民、造父不尽其馬。」を現代語訳せよ。

問三 傍線部①「寡人」・②「吾子」・③「君子」・④「臣」は、ここではそれぞれ誰を指すか。

問四 傍線部F「是以知其失也」とあるが、顔淵は、なぜ東野畢が馬を失うとわかったのか。七五字以内で説明せよ。